

館蔵品展「仕切書にみる北前船交易 ～堀田家・八坂家文書から～」 出品目録

〔会期：2021年11月20日(土)～2022年1月10日(月・祝)〕

平成30年(2018)5月24日、高岡市は文化庁から日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間（北前船寄港地・船主集落）」に、港町「伏木」を中心とした市内の文化財が認定されています。

当館には伏木の有力な廻船問屋「七軒問屋」の筆頭である堀田家（鶴屋）、及びその親戚の廻船問屋の八坂家（車屋）それぞれの古文書一括が収蔵されています。

「仕切書」とは北前船主と各地の問屋が商品を売買する際に発行された文書です。そこから各地の特産品や各家が何を主に取り扱ったのかなどさまざまなことがみえてきます。

本展では「仕切書」を通して北前船交易の一端を紹介します。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
1	日本遺産「北前船寄港地」、伏木の歴史等紹介パネル		3	—	平成30年5月24日付で伏木を中心とした高岡の文化 財が日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ 異空間(北前船寄港地・船主集落)」に追加認定された	高岡市HP、文化庁HP
2	「越中国資産較」(複写)	明治23年(1890)	1	—	越中国(富山県)内における資産家番付表。左列の射水・砺波郡の最上段に「堀田善右衛門」、中央部の「行司」には「八坂金平」の名があり堀田家と八坂家が、当時番付の上位にいたことがよくわかる	個人
3	写真「帆船と蒸気船」	大正13年(1924)	1	—	伏木港内に大きく帆を広げた帆船(北前船)と蒸気船が行き来する風景	高岡市
4	絵葉書「伏木等の諸商標」(複写)		1	—	伏木地域の商店や問屋などの商標を1枚の絵葉書にまとめたもの。伏木の有力な廻船問屋「七軒問屋」の筆頭である堀田家(鶴屋)「ヤマイチ」と、その親戚の廻船問屋の八坂家(車屋)「ヤママル」それぞれの商標が掲載されている。中央には伏木港の写真も入っている	個人
5	北海道産物会所用達申付状(藤井・車屋・鶴屋宛)	明治3年(1871)年8月	1	18.0×69.5	開拓使(新潟出張所)北海道産物会所が、いわゆる「御用達」商に命じたもの。宛先は伏木湊の藤井(能登屋)三右衛門(能三)、車屋(八坂)金兵衛、鶴屋(堀田)善右衛門の3名。この3家が当時の伏木を代表する廻船問屋であり、これまで多くの北海道の産物を商っていたことがうかがえる。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
6	「船主祈願書」	明治9～15年(1876～82)	1	24.0×18.0	堀田家の縁戚・八坂家(車屋)に伝来する文書。高岡市西田の国泰寺(現臨済宗国泰寺派本山)の勸進(航海安全・商売繁盛祈願)に応じた北前船主たちの連名簿。明治9・11～15年の6期にわたり、船名46艘と船主名が列記されており、情報の少ないこの時代の貴重な史料である。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
7	表「船主祈願書連名」(複写)		1	—	上記史料内容を正和氏が表化。明治9年をみると、八坂金平は最多の7艘、堀田善右衛門は平能五兵衛と共に4艘の2位タイである	正和勝之助著『越中伏木湊と海商百家』(桂書房、1995年)p300表を一部改変

8	船中名号	江戸末～明治前期	6	14.0×19.0	船中での本尊。八坂家が所有する北前船5艘の各船名（国栄丸・住恵丸・瑜力丸・貴宝丸・大祥丸）が記され、中央・右には六字名号「南無阿弥陀仏」（祐天大僧正）の刷物が貼られている。祐天(1637～1718)は徳川綱吉・家宣らの帰依を受け、1711年増上寺36世・大僧正となった。六字名号を書いて頒布し、奈良・鎌倉の大仏を修補し、多くの廃寺を復興した。生き仏として熱狂的に崇拝されていた。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
9	解説パネル「堀田家小史」		1	—	伏木の有力な廻船問屋「七軒問屋」の筆頭である堀田家（鶴屋）の解説	当館
10	写真「第六代堀田善右衛門」（複写）		1	—	名は八郎平（1826～1905）。八坂家次男として生まれるが、堀田家に養子として入り家業を継いだ。堀田家「中興の祖」とよばれた	正和勝之助著 『越中伏木湊と 海商百家』（桂 書房、1995年） より
11	写真「伏木銀行」（複写）		1	—	明治29年(1896)創業。六代堀田善右衛門（八郎平）が音頭を取って伏木中道に創設、初代頭取でもあった（取締役は四代八坂金平）。明治43年(1910)、建物は伏木湊町に移転・新築された。高岡市で数少ない和洋折衷スタイルの銀行建築で、現在は高岡商工会議所伏木支所になっている。登録有形文化財（1996年12月20日登録）	個人
12	写真「第七代堀田善右衛門」（複写）	明治42年(1909)	1	—	名は善五郎（1846～1924）。先代の跡を受け、家業（廻船業）を拡張した。それだけでなく、伏木銀行頭取、関貯蓄銀行取締役、伏木新倉庫監査役など各会社の重役を務めた。また伏木の行政にも積極的に関わった	高岡市伏木 気象資料館
13	写真「伏木神社（高岡市伏木東一宮）」（複写）		1	—	社伝によると、天平4年(733)年9月に神明宮として伊勢皇大神宮から蔵ヶ浜に勧請され、国守・大伴家持から厚く崇敬されたといわれる（1883年伏木神社と改称）。その後、伏木港の繁栄により、北前船の船主や船頭が海上安全を祈って鳥居や灯籠、玉垣などを奉納した。5月15日、北前船寄港の海岸鎮護・海上安全祈願のため曳山を建造した起源をもつ勇壮な行事・春季例大祭「伏木曳山祭（けんか山）」が行われる。高岡市無形民俗文化財	当館
14	写真「伏木神社灯籠に刻まれた寄進者名」（複写）	文政2年(1819)9月寄進	1	—	伏木神社の灯籠（1対）に寄進者17名が刻まれる。鶴屋（堀田）善右衛門、車屋（八坂）半兵衛の名が見える。石工は赤間関の小倉清八	当館
15	引札「諸廻船問屋越中伏木港 堀田善右衛門」（複写）	明治19年(1886)	1	—	廻船問屋・堀田善右衛門の引札（暦付）。引札とは、現在の広告チラシに相当するもの。江戸時代に登場し、昭和初期頃まで刷られた。堀田家出身で芥川賞作家・堀田善衛の母・くにの『堀田家の昔話』に、善衛が北海道礼文島の宿で、堀田家の「こよみ」を見たという話が記されている	当館 (堀田一善氏)

16	写真「堀田善右衛門君 米穀肥料商店」(複写)	明治43年(1910)	1	—	明治22年(1889)、堀田家は河港近くの伏木湊町に事務所兼倉庫として「堀田善右衛門商店」を開設した。大正8年(1919)には合名会社となった	『富山県官民肖像録』(有終社、1910年)
17	『中越商工便覧』(初版)より「堀田善右衛門商店」(複写)	明治21年(1888)	1	—	富山県内の各種商店170店の外観が銅版画により描かれている冊子。商家の表構えとともに、屋号、家印、営業種目や由緒、宣伝文など多くの情報が記載されている。	当館
18	写真「堀田家菩提寺 孝徳山西念寺」(複写)		1	—	西念寺は、氷見の南大町にある浄土宗寺院。堀田家の菩提寺。後醍醐天皇の皇子宗良親王ゆかりの創建伝説もある	当館
19	写真「氷見市・孝徳山西念寺 堀田家の墓」(複写)		2	—	向って右側が堀田本家の、左は分家の墓。本家の墓は、「中興の墓」とされ、大正6年(1917)12月に7代堀田善右衛門によって建立、分家の墓は、分家の祖・堀田善九郎によって翌年5月、「累代墓」(先祖代々受け継がれる墓)として建立された。昭和13年(1938)の氷見町大火の際、右の本家の墓の上部が落下したと伝わり、寺域を貫いて町道が通ったため、墓域が狭くなったという	当館
20	越中新米仕切書	明治13年(1880)6月	1	31.2×57.0	大阪の商人・大三輪与市郎が、堀田家持船の開運丸船頭・伝左衛門より、越中新米700俵(約42トン)を3,140円余(現在の約6,300万円)で購入した際の仕切書。堀田家では、主に北海道小樽で米を売り、小樽の西約30km、積丹半島北東部の古平で鰯の肥料を買って、大阪で販売していた。堀田家では、全体の約4割も米を取り扱っていた。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
21	越中米仕切書	明治28年(1895)4月28日	1	27.8×39.6	北海道江差港の瀬戸太兵衛が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎より、越中米43俵(約2.6トン)を135円余(現在の約200万円)で購入した際の仕切書。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
22	鰯𩺰粕・笹目仕切書	明治31年(1898)8月15日	1	28.0×20.3	北海道・古平港の商人・今井平五郎が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎へ、鰯肥(鰯肥料)のうちの鰯𩺰粕(鰯を大釜で茹で油や水を絞った粕の肥料)計14本と笹目(鰯のエラを干した肥料)1本を、計67円余(現在の約100万円)で売却した仕切書。北海道の鰯肥料は、江戸後期以降、化学肥料が普及する昭和中期頃まで広く全国的に使われ、北前船の主要な商品だった。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
23	胴鰯送り状	明治14年(1881)9月14日	1	29.5×38.4	堀田善右衛門と高岡袋町・灰屋(平能)五平が古平港(北海道古平町)の歳井旧七から、胴鰯1,000束(約7.5トン)を現在の約580万円で購入した際の送り状。胴鰯は、食用の身欠鰯を取った後に干してできた肥料で、北陸でよく使われた。本仕切書から、伏木と高岡の北前船主が共同で商売している注目すべき事例であることが読み取れる。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)

24	八幡箆・越中大間縄仕切書	明治30年 (1897)6月5日	1	29.0×20.4	北海道・古平港の商人・今井平五郎が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎へ、八幡箆（鯨締粕の梱包資材。七尾の特産品）485疋を390円余（現在の約580万円）、越中大間縄（農業、または測量などに用いる縄）245丸を56円余（現在の約84万円）で売却した際の仕切書。間縄は、一間（約1.8m）ごとに印がつけられた縄。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
25	氷見箆仕切書	明治30年 (1897)8月15日	1	24.6×34.4	北海道・古平港の商人・小町安右衛門が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎へ、氷見箆（藁製の鯨肥梱包材）439束を193円余（現在の約290万円）で売却した仕切書。氷見や七尾の箆も北前船で伏木から運ばれていた。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
26	実子網（漁網）仕切書	明治30年 (1897)5月14日	1	27.8×40.1	堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎が、北海道・古平港の商人・小町安右衛門より、漁網300間を金12円余（現在の約20万円）で売却した際の仕切書。実子網は実子（稲の穂首の藁しべ）で縄（より）を掛けて作った縄製の網。実子縄は藁縄よりも細く縄（より）で水にも強く、漁網に適していた。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
27	解説パネル「釧路昆布について」		1	—	釧路（長）昆布は、長いものは最大20mもあり生産量も多く、佃煮昆布や昆布巻き等の材料として使用される大衆的な昆布である	—
28	釧路昆布仕切書	明治10年 (1877)10月9日	1	30.6×29.1	函館の商人・井村利平が、堀田家持船の徳衆丸船頭・儀助へ、釧路昆布504駄（約13トン）を470円余（現在の約940万円）で売却した際の仕切書。北前船といえば昆布というイメージがあるが、堀田家には本史料を含めて2点、八坂家にはわずか1点の仕切書しか確認できない。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
29	小豆仕切書	明治28年 (1895)9月5日	1	24.7×34.1	堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎が、北海道江差港の万歳屋喜八より、小豆7俵（420kg）を14円余（現在の約21万円）で購入した際の仕切書。今回の調査で、堀田家での小豆の仕切書は2点あったことがわかった。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
30	越中畳仕切書	明治30年 (1897)8月14日	1	28.1×39.8	北海道・古平港の商人・渡辺宗作が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎へ、越中畳100挺を60円（現在の約90万円）で売却した際の仕切書。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)
31	石鹼仕切書	明治30年 (1897)8月14日	1	24.4×33.4	古平港新地町の商人・真木善吉が、堀田家持船の開運丸船頭・伝次郎へ、石鹼18ダース（216個）を4円余（現在の約6万円）で購入した際の仕切書。堀田家文書のうち	当館 (堀田一善氏)

32	解説パネル「堀田家文書の仕切書（明治期）商品集計」	—	1	—	堀田家仕切書（明治期／計72件88点）にみる取扱商品内訳は、米35（約39.8%）、鰯肥23（胴鰯12、𩺰粕3等約26.1%）、筵5、網3、砂糖3、鉄3、昆布（釧路・元結）2、縄2、小豆2、綿2などからなる。堀田家では、米が全体の4割を占める取扱商品となっている	当館
33	解説パネル「堀田家文書の仕切書（明治期）取引先集計」	—	1	—	堀田家仕切書（明治期／計72件104点）にみる取引先内訳は、北海道58（約55.8%）、大阪15（約14.4%）、下関14（約13.5%）、境港4、安宅3、美保関（松江市）3、田野浦（北九州市）3、堺2、能登3、三田尻（山口県）1などからなる	当館
34	解説パネル「北海道における堀田家取引港」	—	1	—	堀田家の北海道内における取引港58件の内訳は、古平32（約55%）、小樽17（約29%）、函館（箱館）5（約9%）、江差3、岩内1である	当館
35	解説パネル「八坂家小史」		1	—	伏木の有力な廻船問屋「七軒問屋」の筆頭・堀田家（鶴屋）親戚の八坂家の歴史についての解説	当館
36	桂静章画《二代八坂半兵衛画像》（写真）	江戸末期～明治初期頃	1	—	二代八坂（車屋）半兵衛（のち金兵衛／？～1865）の画像。「八坂家中興の祖」とされた人物である。高岡の町絵師・桂静章（生没年未詳）は、通町の大工弥平の子として生まれる。安政・万延（1854～1860）頃の人物。円山派の中島来章（1796～1871）に師事し、人物山水画をよくしたという	個人
37	写真「八坂金平氏米穀肥料商店」（複写）	明治43年（1910）	1	—	写真の四代金平（1848～1929）は、伏木銀行取締役、日本赤十字社特別社員なども務めた	『富山県官民肖像録』（有終社、1910年）より
38	写真「四代八坂金平」（複写）		1	—	名は金助（1848～1929）。四代金平。六代堀田善右衛門次男。1862年に三代金平の養子となった。家業のほか、堀田家と共同で経営した（株）伏木銀行、伏木新倉庫（株）、三越セメント（株）の各取締役を務めた。4代金平は俳号を松堂、宗和流の茶人でもあった	『富山県官民肖像録』（有終社、1910年）より
39	解説パネル「鰯肥・鰯燻等について」	—	2	—	鰯の大群が押し寄せる北海道の西岸では、明治後期を最盛期（100万トン弱）として昭和前期まで漁額高は多かった。大きな鰯は干して食品としたが、多くは肥料（胴鰯、𩺰粕など多様）として加工された。鰯を煮る鰯燻は高岡産で、天保年間（1830～44）に喜多万右衛門が北海道に販路を開いたと伝わり、それ以降高岡から北海道へ昭和30年頃まで盛んに鰯燻を移出していた	当館

40	胴鯨仕切書	年未詳(酉)7月31日	1	27.3×39.0	車屋(八坂)与助が、北海道の松前・江差の商人・常田弥助より、胴鯨200束を銭236貫文(現在の約380万円)で購入した際の仕切書。堀田家・八坂家両家とも、胴鯨の仕切書の数も多く、主要な取扱い商品だったことがわかる。胴鯨は八坂家全体の仕切書の約15%を占めている。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
41	笹目仕切書	年未詳 酉8月朔日	1	27.0×53.8	八坂与助が、北海道・江差の商人・関川与左衛門より、笹目(鯨のエラを干した鯨肥)50本を銭447貫750文(現在の約520万円)で購入した際の仕切書。鯨肥は、米や菜種、綿花、藍などの商品作物を育てるための大事な肥料であった。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
42	解説パネル『木綿の原料「繰綿」と・「締綿・玉綿」について』		1	—	繰綿とは、綿繰り車(機)にかけて種を取り去っただけの未精製の綿。締綿は1672年創設の高岡綿場が主に仕入れていた堺(大阪府)の綿場からの繰綿のこと。1824年、高岡綿場は加賀藩唯一の綿場となり、取引量が増大したが質が低下した。翌年綿商人7人は競争原理による綿場刷新のため、従来の堺綿を「締綿場」とし、新規に現大阪市や山陽地方から綿を購入して「玉綿場」を立てることを計画し、現地交渉に成功した	当館
43	解説パネル「高岡・伏木の北前船主が仲介する主な物流経済」		1	—	伏木をはじめとした越中(富山県)の北前船は、地元の米などを仕入れ北海道で売り、鯨肥や昆布などを仕入れて帰る。そして地元でその一部を売り、再度米などを仕入れて、大坂・堺などで鯨肥と米を売り、帰りに木綿原料(繰綿)や雑貨などを仕入れて地元で販売していた。つまり、伏木などの北前船主は【越中(富山県)】—【北海道】—【大坂・堺】を基軸とする「三角貿易」のような物流経済を担っていたといえる。また北前船でもたらされた木綿原料は、加賀藩で唯一独占販売権を認可されていた「高岡綿場」の綿商人により、越中新川郡(富山県東部)などの農家に供給された。仕立てられた「新川木綿」は藩を代表する特産品であった。そのうち約15%は高岡で染色され、着物の裏地などに使われる「高岡染(高岡裏地)」として著名だった(のち高岡捺染として発展)	当館
44	解説パネル「高岡綿商人と大坂・堺綿商人、北前船主・船頭らの奉納石灯籠」		1	—	幕末期、大坂と高岡の綿商人、及び北前船主・船頭らが、大坂の住吉大社に石灯籠を奉納し、その10年後に同じメンバーで、高岡関野神社にも奉納された。それぞれの石灯籠に刻まれた人物について紹介したパネル	当館

45	繰綿仕切書	明治6年(1873)6月	1	31.8×51.8	大阪の綿商・三島又三郎が、八坂金兵衛へ繰綿42本を357円余（現在の714万円）で売却した仕切書（泉は大阪堺の綿商で保証人）。繰綿とは、綿繰り車（機）にかけて種を取り去っただけの精製していない木綿の原料綿のこと。綿の栽培には大量の鯀肥料が必要で、八坂家では原料綿を大阪、堺から約半数ずつ仕入れて鯀肥を売り、北海道・江差で米を売り鯀肥を仕入れた。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
46	繰綿仕切書	明治6年(1873)10月22日	1	32.0×34.5	車屋（八坂）金兵衛が、大阪堺の綿商・泉弥平より、繰綿（木綿原料）42本を352円余（現在の約700万円）で購入した際の仕切書（末尾の「御支配 釜屋伊助」は保証人）。八坂家は、全体の約4割も綿を取り扱っており、綿は八坂家の得意分野だった。綿は江戸後期以降高岡の主要商品で、新川郡の農家に供給し、「新川木綿」となって、高岡・伏木から全国に販売された。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
47	吉久米仕切書	明治6年(1873)10月24日	1	31.5×60.0	八坂与助が、大阪堺の商人・竹中武平に、吉久米536俵（約32.2トン）を988円余（現在の約1,800万円）で売却した際の仕切書。昨年12月、吉久は市内3地区目の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定された。加賀藩最大の御蔵であった「吉久御蔵」に入っていた吉久米は、「ブランド米」として全国で広く流通していた可能性がある。八坂家にある米の仕切書9点のうち、7点も「吉久米」だった。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
48	吉久米目録覚	明治6年(1873)11月1日	1	18.0×30.0	八坂与助が、大阪堺の商人・竹中武平に、吉久米536俵（約32.2トン）、同古米327俵（約19.6トン）を1,524円余（現在の約3,000万円）で売却した際の仕切書。吉久米が全国に流通していたことを示す貴重な資料である。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
49	土佐中保（塵紙）仕切書	年未詳(酉)7月25日	1	28.9×48.2	山口県下関の商人・北国屋与左衛門が、車屋（八坂）与助に、土佐中保（塵紙）10箇を33両余（現在の約230万円）で売却した際の仕切書。中保は質の悪い再生紙で、鼻紙や落し紙（トイレトペーパー）。さらに粗悪な黒保（浅草紙）もあった。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
50	三つ切塩仕切書	年未詳(午)10月22日	1	29.3×58.6	車屋（八坂）利右衛門が、鳥取県の境港の商人・油屋周蔵より、三つ切塩340俵を64両余（現在の約500万円）で購入した際の仕切書。八坂家の取引先で、境港の仕切書は10点あることがわかった。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
51	白砂糖仕切書	年未詳7月28日	1	18.4×102.8	北海道・江差の商人・川村屋源治郎が、車屋（八坂）喜三郎より中白砂糖5丁を銭223貫431文余（現在の約260万円）で購入した際の仕切書。八坂家には白砂糖の仕切書が5点あることがわかった。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)

52	中身欠仕切書	年未詳(酉)8月2日	1	28.7×41.0	車屋(八坂)喜三郎が、北海道・江差の商人・矢木喜右衛門より、中身欠(鯨の頭と内臓を取り、背側の身を干したものの)46本を銭332貫文(現在の約380万円)で購入した際の仕切書。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
53	鉄仕切書	午〔明治3年(1870)カ〕10月22日	1	29.0×63.0	鳥取県境港の商人・油屋周蔵が、車屋(八坂)の沖(雇われ)船頭・利右衛門へ鉄25駄半(約3.4トン)を137両余(現在の約1千万円)で売却した仕切書	当館 (今井昭次氏)
54	生掛蠟燭仕切書	年月日未詳	1	28.6×58.5	車屋(八坂)勘右衛門が、京都・宮津の商人・元結屋藤三郎より、生掛蠟燭21箱を131両余(現在の約90万円)で購入した際の仕切書。生掛(和蠟燭とは、溶けた木蠟を何度も手で刷り込んで作る蠟燭のこと。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
55	甘茶仕切書	年未詳(午)10月23日	1	29.3×70.3	車屋(八坂)利右衛門が、鳥取県の境港の商人・油屋周蔵より、甘茶60本を58両余(現在の約400万円)で購入した際の仕切書。甘茶とは、ヤマアジサイの若い葉を蒸して揉み、乾燥させたもの。八坂家文書のうち	当館 (今井昭次氏)
56	解説パネル「八坂家文書の仕切書(明治期)商品集計」	—	1	—	八坂家仕切書(明治初期/計90件97点)にみる取扱商品内訳は、綿46(うち繰綿31、締綿9、不明6等約40.9%)、鯨肥16(胴鯨8、筒鯨(一本干)4、笹目(エラ干)2、鰯粕1、羽鯨1/約15.8%)、米9(うち吉久米7/約8.9%)、紙6、塩6、白砂糖5、身欠鯨(食用)4、鉄4(うち銅1)、生蠟2(宮津)、刻煙草(阿波)2、甘茶1(境港)、鋼1(境港)、細布昆布1(江差)などからなる。八坂家では、綿が全体の4割を占める取扱商品となっている	当館
57	解説パネル「八坂家文書の仕切書(明治期)取引先集計」	—	1	—	八坂家仕切書(明治初期/計90件97点)にみる取引先内訳は、大坂28(約28.9%)、堺24(約24.7%)、江差19(約19.6%)、境港(鳥取)10(約10.3%)、赤間関(下関)7、丹後3、秋田(戸賀)3、近江2、伏木1などからなる	当館

※複写物、解説パネル等の寸法は省きました。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

計57件66点